

『仮面の告白』論

——母からの親和的承認をめぐる——

五十嵐 礼 子

はじめに

よく知られているように、小説を書き始めた思春期の頃から三島は、仕上げた原稿はいつも真つ先に母・倭文重に見せていたという。倭文重は、いったいどのような思いで、大蔵省を辞し作家として立つ覚悟で執筆された『仮面の告白』を受け止めたのであろうか。溺愛してやまない最愛の息子に、同性愛的な傾向があることを、薄々は感づいていたのか。また、母が最初の読者であることを自覚していながら、三島もなぜこのような「告白」をなしたのであろうか。「聖セバスチャン」との遭遇による初めての精通経験を、母に向けて書くことがなぜ出来たのであろうか。母は読み続けることは出来たのだろうか。素朴な疑問がある。

結論を先走って述べると、三島は『仮面の告白』を書くことで、どうしても得られなかった、母からの親和的承認を求めていたのではないか。同性愛の告白の物語ではなく、母恋いの物語であったから、倭文重は読むことが出来たのではないか。作品に散りばめられている「母」というインデックスを頼りに、『仮面の告白』の、とある一面に迫ってみたい。

一 産湯の場面

私には一箇所だけありありと自分の目で見たとした思はれないところがあつた。産湯を使はされた盥のふちのところである。下したての爽やかな木肌の盥で、内がはから見ると、ふちのところにはほんのりと光がさしてゐた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているやうにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえて届かなかつた。

豊かに包み込むような光に照らされ、黄金と見まがうような盥で産湯に浸かる主人公は、特別な存在としてこの世に生を受けた。その光景を見たと言いはるほどの強烈な自意識の持ち主であつた。お湯を「水」と敢えて表現しているのは、主人公の周囲を取り囲む豊かな水は、ナルシスの水鏡を意味しているからであらう。彼は、生まれながらのナルシストとして誕生しているのだ。

主人公が子供のころ、出生の記憶があるという大人たちは、「あのこと」——性的な情報を、子供が聞き出そうとしているのかと、嫌悪感を露わにしたという。しかし自分は決して男女の性にまつわる知識を得たいのではないと否定し、その上でこの産湯の記憶が「生

れた光景」として語られている。この豊かな光に照らされた場面は、主人公がこの世にまさしく生命を得た瞬間を述べているのではない。すると、この盥は子宮のイメージでもあろうか。胎内だから水は、こぼれそうで決してこぼれないのかもしれない。

この盥が、子宮のイメージといえるもう一つの理由は、生まれたばかりの主人公が産湯に入れられているのに、赤ん坊を湯に入れているはずの大人の気配が全く感じられないことだ。それどころか「内がはから」盥のふちを見ているという赤ん坊の様子は、まるで一人で湯に浮かんでいるようだ。それは、この盥が母胎内をイメージしているからであろう。だから、描写からは安定感すら感じられないのだ。赤ん坊は子宮から外界に出たとき、自発呼吸をせねばならず、母の胎内にて羊水に浮かび摂取も排泄も自在であった状態からは遠く隔てられる。それはどれほど恐ろしく、不自由な経験であろうか。それなのに湯につかる赤ん坊の様子からは、そのような不安感は感じられない。泣いたりする様子もなく、「爽やかな木肌の盥」で湯に入る様子からは、平穏さまでが漂う。一般的にいつて赤ん坊が沐浴時に安心した様子を見せるのは、それが子宮内の羊水を感じさせるからだ。まして主人公の状態が出生以前の状態を暗示しているなら、主人公はまさしく母胎内にあるともいえるので、ここに漂う安心感は当然であろう。

生まれ出た人間はその瞬間から、死へ向かって時を刻み始めるので、生誕は同時に死の要素を合わせ持つ。誕生の無の状態が安定したものであればあるほど、実際の生が葛藤に満ちたものであればあるほど、おそらくは誕生と表裏一体の死は憧憬となりうるだろう。「自分が撃たれて死んでゆくといふ状態にえもいはれぬ快さがあつ

た」という死への甘い憧憬には、母胎回帰の願望があるのではない。誕生時の光と水に包まれた、あの瞬間に戻りたいと。

このような産湯の場面の後、「震災の翌々年に私は生れた」と、改めて自身の誕生についての客観的描写が続く。「古い筆筒のやうにきしむ家」に嫁いだ母親は「かよわ」く「美しい花嫁」であり、姑に息子を奪われ取り返すことは出来なかった。そのため「病氣と老いの匂ひにむせかへる」醜悪な空間で、美しい母と密着した時間を遠くに憧れながら成育してゆく。「狂ほしい詩的な魂」の持ち主である祖母の支配下で、母から引き離されているからこそ、母は追いかけていたい存在であり、実際一歳になるかならないかの時、追いかけて行つて階段から落ちて、危うい経験をしている。

やがて主人公は人生をある意味決定づける汚穢屋と邂逅する。その場に導いたのが女であることが繰り返し「女の人に手を引かれ」「女は私の手を強く引いて」などと強調される。産む性を抱えた女性性は、「大地」や「根」につながる存在だ。三島は「私は、法律よりもっと広い広大な社会的習慣、旧習慣そのものに、女性的諸力を見るものである。それは歴史の奥深くまでつづいていて、ついには土着のものにつながっている。」とも述べており、大地に深く根差した女性の生命力の逞しさや、旧習慣に寄り添っているがゆえの揺らがなさを強調している。ここに女性に対する軽侮と畏怖が見てとれる。

つまり、「根の母」が、後に主人公を苦しめる同性愛的な傾向を悟らせる場面に導いた。しかしながら、「根の母」は社会のルールから排除された存在を包み込むほどの包容力はないので、主人公の存在を疎外する「悪意」を持つているのだ。「根の母の悪意ある愛」

とはそのように理解できる。

二 扮装慾

あるとき主人公は、女奇術師天勝の舞台を見て魅了されてしまふ。

「彼女は豊かな肢体を、黙示録の大淫婦めいた衣装に包んで、舞台の上をのびやかに散歩した。手使使ひ特有の亡命貴族のやうな勿体ぶつた鷹揚さと、あの一種沈鬱な愛嬌と、あの女丈夫らしい物腰（傍線引用者・以下同様）で、観客を魅了したという。藤山新太郎によると、天勝は、満年齢9歳で天一一座に家庭の貧困から入座し、後には、天一の愛人となり、アメリカや欧州での興行によつて芸をより洗練させ、天一死後は、自分の一座を苦勞の末立ち上げたという。大正時代の三大美人に挙げられる等、人気は高く、数奇な生涯を辿つた手妻使用である。フランスでは、貴族に見初められたこともあつたほどの美貌の持ち主だつたようだ。「亡命貴族のやうな」との描写はそのやうな一面を、また「沈鬱」「女丈夫らしい」は苦勞の多かつた天勝の生涯を象徴している。天勝の本質を突いた的を射ている表現だ。主人公によつて天勝の舞台は、「光輝」と「秘密」に満ちた「夜」が現前したものだつた。「安物のみが発する思ひ切つた光輝に身を委ねた贗造の衣裳」とあるやうに、まがい物で身を包み、自分の存在そのものを覆ひ隠し、別の人間になる―扮装の喜びを、主人公に知らしめた。

主人公が天勝をまねるのは、異性装への興味というよりは、主に偽物になりたいとの変身願望であろう。主人公は、祖母の部屋の人として生活するうち、現実にはないものに憧れ、童話の世界によりリアルティを見いだしていた。現実の空間に突如具現化した、空

想の世界にしか存在し得なかつたまがい物の怪しい舞台に引き込まれるのは当然だ。まして贗物で自分の本質を隠し別の人間になれるのだから「扮装」に魅了されても不思議はない。後に三島は「扮装狂」⁽⁴⁾で、「僕はキラキラした安っぽい挑発的な儂い華奢なもの『すべてを愛した。』と述べ「僕は又、天勝の奇術舞踏に出てくる大ぜいの薔薇の騎士たちを愛した。彼女達は楽屋でも、日常の生活の上でも、あの危険な、誤魔化しにみちた、佻しく絢爛な、表情と身振り」とを、決して忘れまいと思われた。そこには幼児の僕にとつて禁断の書物であつた講談倶楽部やキングに出てくる血みどろの挿絵のやうな、美しい生き方がされているのだと僕は疑わなかつた。長い劍が触れ合うたびごとに本当に紫や赤の火花がとびちり、銀紙や色ブリキで作られた衣裳が肉感的にゆすぶられ乍らキラキラきらめきわたるのをみて、僕は自分の胸がどうしてこんなに高鳴るのか分からなかつた。」と続けている。

主人公が天勝の舞台に憧れるもう一つの理由は、ここに見られるやうに破滅への強い衝動である。自分ではないものになり、制限の多い現在の生活から解放され、いい加減で自堕落な人生に落ちて身を滅ぼしたいという、倒錯した願望である。墮落への期待が付加され、舞台は主人公によつて、一層感興をそそるものとなるのだ。やがて主人公は家族の目を盗んで女装に憂き身をやつすやうになる。それについて「デカダンの帝王獣、ヘーリオガバルスに」「同様の期待を見い」だせると述べている。ヘーリオガバルスは、ローマ史にその名を放奔な性行動で身を滅した悪君主として名を残しており、この例示からも倒錯した破戒衝動を指摘できる。

三 母の拒絶

母の着物を身につけ、天勝の衣装をして人前に出た主人公は、次のような母の拒絶に会う。

私の熱狂は、自分が扮した天勝が多くの目にさらされてゐるといふ意識に集中され、いはばただ私自身をしか見てゐなかつた。しかしふとした加減で、私は母の顔を見た。母はこころもち青ざめて、放心したやうに坐つてゐた。そして私と目が合ふと、その目がすつと伏せられた。私は了解した。涙が滲んで来た。また、前出「扮装狂」では、母の拒絶にあつた衝撃がより幼い表現で語られている。

僕はついお母様の顔をみてしまった。お母さまはいくらか青い顔をして放心したやうに僕をみていられたが、僕と目をあわすつと目を伏せられてしまはれた。ああそんなことがあつてよいものかしら。お母様が僕の目をよけるなんて主人公は、母が目をそらしたことに強い衝撃を受け、「罪に先立つ悔恨」を感じたという。

なぜ母は目を逸らしたのか。おそらくは、他愛のない子供の遊戯とは思えない狂気を感じたからであろう。この子供の中に宿っている破滅への衝動とは言えないまでも、何か正常さとはかけ離れた熱情に、母までが正視できなかつたのだ。それほどに主人公には倒錯した狂気があつた。その後は「父母の目を盗んで」⁵扮装に身をやつすやうになつたとある。が、倭文重の「暴流のごとく」⁵には、三島はよく母の前でも、「シーツやショール、ボタン、造花」を身につけ、「蛇に噛まれてもだえるクレオパトラを演」じたりしており、「天勝

はレパートリーの中でも上位」だつたという。なぜ、「父母の目をぬすんで、(すでに十分な罪の喜びを以て)、妹や弟を相手に、クレオパトラの衣装に憂身をやつした」としたのか。つまり、どうして自身の基本的欲求が拒絶される物語にしなければならなかつたのかを考えた。

生来「子供は母親との愛情関係のなかではじめて自分の存在が肯定されているという感觸を得ることが出来る」という。⁶特に「乳児にとつて、母親は自分の不快感をすべて排除し、常に欲求を満たすやうとしてくれる存在」⁷だ。子供はこのかかわりの中で自己肯定感を培う。だから母親の姿が少しでも見えなくなると後追いをし、泣くのである。

主人公にはこの経験が欠けている。本来「万能感の中で、自己に對する無条件の承認を実感」⁸し、「この充足感こそ自己価値に對する承認の欲望を生み出す」⁹はずであるのに、主人公にはそれが無い。このような親和的承認を得られた子供は「やがて他者の姿や鏡に映つた自分の姿を目にすることで身体像が形成され他者から見た自分はどうなるのか少しづつ意識できるようになる」¹⁰という。

「何をしなくても愛され、認めてもらえるような原初的な『無条件の承認』¹¹から隔てられ、生まれた時から「水鏡」が与えられた主人公は、最初から自分自身で他者の目に映つた自己像を構築するしかない。主人公は母の拒絶のまなざしから「罪に先立つ悔恨」を感じ取っている。自身の存在それ自体が悔恨を抱え込んでおり、何も罪は犯していないが、存在そのものが罪なのだ。

元来女性はいくつかの役割を持つ。女(妻)であり、娘(嫁)であり、母である。いつも母であるというようない貫存在ではない。

主人公の眼差しが捉えたのは、理想の母親像とは違う一面であった。妻として嫁として困って目を伏せた。自分ではないものになりたいという内密な願望が、母の他者性の前に暴かれた時、つまり主人公自身にも受け止めきれないほどの願望が、母の眼差しにさらされ拒絶されたとき、母の多様性を理解しない主人公は激しく動揺し、存在そのものが罪なのだと言念を感じ取るしかない。母が扮装を認めないことで、主人公は母からの無条件の承認をあきらめざるを得なかったことが強調されるのだ。我々は承認なしに自己肯定感や、自己の存在意義を確立することは難しく、承認を得るために、「親にとって『価値ある行為』が必要だと感じるようになり、そうした行為によって承認を得ようとしはじめる」という。主人公は親戚の家で「一人の男の子であること」の周囲の要求を感じ取り、重荷としながらも男の子らしく「戦争ごっこ」をしたりと、演技によって応えようとするのだ。

一章末尾の夏祭りの場面では、主人公の男達の共同体への憧れが語られる。無条件の承認を得られないままの主人公は、共同体による承認に憧れている。しかし、女系世界で養育されたが故に男であることが実は苦痛で、ひ弱な肉体しか持たない自分は、男たちの共同体から承認されることはないだろうという予感がある。その悲哀が流血への衝動や死への憧憬となって、主人公を観念の世界に導く。観念の世界では主人公は自由自在であり、物語さえ好きに読み替えることが出来るのだ。大人になることは、より現実世界との接触が増すため不安で仕方がない。母からの無条件の承認を得られないまま、成長しつづつある不安が、母体回帰への幻想、甘美な悲劇的な死への憧れをより募らせる。このような堂々巡りの循環のなかに、主

人公は身を置いているのだ。

以上の検討を通じて、主人公が親和的承認から隔てられたが故に、別の承認を引き出すようになるまでを確認した。

四 女性との恋愛——共同体からの承認を求めて

中等科時代、学校生活の中にあっても主人公は、観念の世界に留まり、現実においては年上の同級生近江に初恋を覚えているが、比較的観念の世界に常住している。また、近江への憧れは、自分の理想の投影であり、自己愛に過ぎないことはすでに論証されている通りだ。¹³母に承認されないのは、自身に欠落したものがあからで、病弱な自身の当為を屈強で理智に欠ける男に見いだし、その人物になる自分を空想しては、強い愛情を感じる甘美な世界を享樂している。

ある日、友人片倉が亡くなりお悔みに自宅を訪ねた。「若く美しい瘦形の未亡人」から「遊びに来てくれ」との伝言を別の友人に宛てて頼まれる。主人公がその旨を伝えると、その友人が「貴様も人が悪くなりやがったなあ。意味深な笑ひ方なんかしやがって」と言い、顔を「羞恥で真赧」にするのを見て、主人公は愕然する。自分には、このような異性への興味関心が全く欠如していることに気が付かされたからだ。

以降「意識の操作」を積極的に行う。「好色家」を装い、バスの女車掌に対して「あの制服さ。あの体にびつたりしてゐるところがいいんだらう」と類推で言い放つたりすると、友人達は「君つて相当なもんだねえ」と称賛してくれる。母から承認されない以上、母の望む人間になるためにも、共同体において承認されることが、

主人公の当為だ。三島は先の「扮装欲」の中で、近江の前身であらうブラと仇名される人物と、このようなやり取りをさせている。

「平岡！貴様接吻したことある？」僕は後ろから来ていきなり目をふさがれたような気持であった。僕はもうドキドキが止まらなくなつてしまつた。上ずつた声で僕は返事をせずにはいられなかつた。「いや、ないんだ、一度も」「フン」とブラは感興がなさそうに云つた。「面白くもなんともないぜ。やつてみりやあね」

またブラへの思いは、「扮装欲のわづかな変形」だとも述べている。ひ弱な肉体しか持たず、母からの承認も得られていない主人公は、自分ではない者になりたい願望がある。粗暴で秘密めいたブラから、接吻体験を知らされ、また近江が「経験者」であり、「女の家」から通つているなど、女性存在の影がついてまわることを知つた。そこで主人公は、なんとしてでも女性との恋愛を経験しなければならぬと考えるようになったのである。そのような強迫観念の中で知り合つたのが園子である。

五 園子とは

「下手なピアノの音を私はきいた。」それは「日常的なもの」の、一種不出来なものでかしい美しさであつたという。主人公にとつて「宿命的なものとなつた」とある、その展開を確認したい。

主人公にも徴兵の影は差していたのだが、入隊検査ではこじらせた風邪を新米の医師が誤診をしたため、即日帰郷となり、徴兵を免れた。主人公は、なぜ戦争参加から逃げ出したかを厳しく以下のよ

軍隊の意味する「死」からのがれるに足りるほどの私の生が、行手にそびえてゐないことがありありとわかるだけに、あれほど私を営門から駆け出させた力の源が、私にはわかりかねた。私はやはり生きたいのではなからうか？

徴兵され、軍隊という共同体に位置づけられることは、世間一般からの承認を得る、一番手堅い方法のはずだつた。そこから不誠実にも逃げ出した以上、園子を獲得することで、世間並みの男として承認されなければならない。近江のような男となるためにも避けられないことなのだ。

すでに徴兵されている主人公の友人である園子の兄を訪ねるため、M市まで出かける園子一家と待合せの朝、園子は「むこうの階段を青いオーヴァー」を着て降りてきた。その様子を見た主人公は激しく動揺する。

最初の一瞥からこれほど深い・説明のつかない・しかも決して私の仮装の一部ではない悲しみに心を揺ぶられたことはなかつた。悔恨だと私に意識された。しかし私に悔恨の資格を与えた罪があつたであらうか？ 明らかかな矛盾ながら、罪に先立つ悔恨といふものがあるのではなからうか？ 私の存在そのものの悔恨が？ 彼女の姿がそれによびさましたのであらうか？ ややもすれば、それは罪の予感に他ならないのであらうか？

かつて天勝の扮装をして母の拒絶にあつた時と同じ「悔恨」の情を、園子に対して感じてゐる。園子と母は、主人公の存在の根底を押し揺るがし、憧れと、疾しさを感じさせるのだ。

軍隊を逃げ出した後暗さもあり、母から得られない承認を園子に求めて、主人公は迷走しだす。その一方で、同性愛的な傾向にも苦

しみ、板挟みとなっている。しかしながら両者はともに、母親親慕という共通の根を持っている。どちらも母の求める男になるために、園子の恋人にならねばならず、なりたいた自己像の投影を求めて、自己愛の変形として同性への恋心を一方的に募らせる。このような自家撞着を起こしている。

軽井沢で園子と接吻したとき主人公にはなんら性的な興奮は齎されず、自身が正常な男性ではないと結論付けてしまい、うちのめされる。しかし、不自然な計算と緊張の中で、自分の無自覚な肉体的な反応を確認するという、実験そのものが無理な設定なのだから、この結果は当然ではある。しかし、そのような冷静な判断ができないほどの当為に主人公は駆られていたのであろう。

軽井沢からうちひしがれて帰る汽車の中で、主人公は、自分の前に坐っている娘がその母親に甘え切っている様子を目にする。「紺の制服を着た赤十字の看護婦と、その母親らしい貧しい農婦」で、「真赤に肥った娘は、照れかくしに母親に甘えだした。」「ねえ、お腹空いたよ」「まだ早っべや」「だって空いたんだもん。よお、よお」「きき分けもない！」——母親がたうたう負けて弁当をとり出した。」と叙述されている。子供が甘えて母が受け入れるという無条件の承認が、こんなにも巷には当たり前存在しているのだ。にもかかわらず主人公は獲得できないのだ。悄然として帰郷する主人公は、愁嘆に暮れつつも「人間が御飯をたべるという習慣がこれほど無意味に見えたことはなかった」と「根の母」達のやりとりを軽視している。主人公の苦悶は、軽侮している世界へ、承認のために参加しなければならぬことでもあるのだ。

園子の兄から結婚の打診の手紙が届いた。「愛しもせず一人の

女を誘惑して、むかうに愛がもえはじめると捨ててかへりみない男に私はなつたのだ。」と主人公は疾しさには目をつぶり、男として承認を得たことに満足しようと演技する。結婚を断るために母に相談に行く。

窓をあけて私は母を呼んだ。

夏のはげしい光りがひろい菜園の上にかがやいてゐた。トマトや茄子の畑が乾燥した緑をとげとげしく反抗的に太陽のはうへもたげてゐた。その勁い葉脈に太陽はべたべたと、よく煮えた光線を塗りつけてゐた。植物の暗い生命の充溢が、見わたすかざりの菜園のかがやきの下に押しひしがれてゐた。彼方に、こちらへ暗い顔を向けてゐる神社の杜があつた。

母の登場にあたって事細かに自然の生命力の輝きと、力強さが強調され、背後には神秘の「神社の杜の木々」までが描かれている。

「菜園のただなから、青いリボンをつけた大きな麦藁帽子が立上つた。母だった。」と、母親が満ち溢れる大地のエネルギーを背景に、少女のような麦わら帽子を被って現れる。青いリボンは、M市に向かうとき園子が着ていたものも青いオーヴァーで、「青」の色彩に二人の相似性が指摘できよう。園子と母は基本的に日常性に身を置く女性として同類なのだ。上品な奥様らしかった母は「すし日に灼」け、戦中の生活に順応する逞しさをみせてもいる。

「なあによお。用ならそつちから出ていらっしやいよお」と、少女のような口調で母は主人公に話しかけ、「不服さうにのろのろと」主人公の元にやってきた。

あれこれ結婚できない理由をまくし立て、主人公は「母の頑固な反対を」欲しているのだが、『私の母はのどかな寛大な人柄』で

「何だかへんな話なのね」——と大して深く考えもしない様子で口をはさんだ」のだ。このように母が主人公の内面に立ち入ることはない。主人公の有様、苦悩、存在をありのままに理解し、受け入れることはないのだ。主人公がどんなに求めようと親和的承認を与えはしない。作品内の母はそのように大変鈍感な女性だ。それどころか、母は園子と主人公が深い関係になってはいないかと心配までしている。

「莫迦だなあ、お母様つたら」——私は笑ひ出した。私は生れてから、こんな辛い笑ひを笑つたことはないやうな気がした。」といひ、母からの承認を求めているのにそれがすれ違う時、主人公は深く深く傷つく。まして、母は正常な男性であることを疑つてもいけないのだから。「母親つてものは、さういふことを心配するために生きてるやうなものなのよ。大丈夫よ。あなたは信用してゐるわ」と述べるのだが、母としての心配ではなく、息子の男性性に、視線を女性として投げ掛けているに過ぎない。

園子を巻き込んだの接吻の実験は、結果として母からの不承認を改めて認識させる結果となった。主人公は断りの手紙を書き送つた後「私はただ生まれ変わりがたつたのだ」と述べるも、事は簡単ではなく、苦しみは大きい。

六 戦後と園子との再会と

戦後主人公は偶然園子と再会する。「いたつて自然な」再会で、「私はすべてを予知してゐたやうに感じた。この瞬間をずつと以前から知悉してゐたやうに感じた」といふ、穏やかなものだ。他愛のない会話をし歩いていると「一軒の厨口から、びしょぬれの家鴨が

一羽不器用に歩き出して、私たちの前をわめきながら溝ぞひにむかうへゆく。」のを見て主人公は幸福感を感じている。まず、「家鴨」だが、第二章で近江の腋窩にある豊饒な毛に圧倒された主人公は、その後「永いあひだ鏡の前に立つやうに」なり、「私は自分も大きくなれば白鳥になれるものだと思ひ込んでいる家鴨の子のやうであった。」という。この場面と照らし合わせて考えることが可能であろう。園子との関わりは、自身が正常な男性でありたいといひ、いわば「白鳥」になるための試金石であった。「白鳥」になることができず、以前主人公は「醜い家鴨の子」のままであることが表徴されている。

しかしながら、園子との再会が「幸福」なものであるのもまた確かなことだ。園子は「奥さん奥さんしたところ」を感じさせず、変わらない優しさと大らかさを湛えており、主人公を母の代理のやうに安心させる。ただし、「裸の女」といふ言葉を用いる彼女は最早処女ではない。しかも彼女が自分を想っているように感じられ、許しがたい思いに駆られる。彼女が自分に失恋したことで傷ついていなければならぬのだ。そうでなければ、主人公の自意識のシナリオは、破綻してしまうからだ。

主人公は二、三カ月おきに、一、二時間何事もなく会つて別れるやうな時間を、園子と共有する。それは「人工的な『正常さ』」をその空間に出現させ、ほとんど架空の『愛』を瞬間瞬間に支へようとする危険な作業に園子を誘つた」ものだ。綱渡りのやうに自分の贖のジェンダーアイデンティティを確立しようとする試みに、軽井沢での初恋の余韻を利用して、園子を巻き込んだ。また、醜い家鴨の子が、母家鴨に巡り逢うことができたやうな、安らぎもそこにはあ

るのである。しかしながら、園子は「正常」であるがゆえに、二人が男女の関係へとやがては発展し、夫を裏切ることになりはしないかと不安にかられるようになる。

アメリカの風俗を「季節はづれの造花」で上辺だけ真似た、醜悪な日本の戦後の風景のなかにあるダンスホールに、主人公は園子を誘う。しかし主人公は、美しい肉体を持った若者に、視線が惹かれてしまうのだ。一瞬間園子の存在を忘れそうになったその時、彼女が「あと五分」と別れの時間が近づいている現実を告げる。その瞬間「私のなかで何かが残酷な力で二つに引裂かれた。雷が落ちて生木が引き裂かれるやうに。私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたましく崩れ落ちる音を私は聴いた。私といふ存在が何か一種のおそろしい『不在』に入れかわる刹那を見たやうな気がした。」という。

園子は主人公に性体験の有無を聞き、それは自分の知っている女性だと最初から決めてかかっていることに主人公は、「彼女は自分が名前を知つてゐる女としか、私を結びつけて考へることを知らないのだ」と、愕く。三島は「母は世間並みの女である。結局、母はすべてが人生のルール通りに運ぶことを望んだ」と述べている。これまで確認してきたようにルール通りにしか物事を考えることをしらない園子と母は同じような存在だ。「きかないで」と「露骨な哀訴」の調子で答える主人公は、園子をおどろかせ、結局園子からの承認は得られなかった。どのように努力をしても決して、母の望む人間にはなれないことを深く悟つたのだ。

おわりに

『仮面の告白』は、これまで見てきたように、母へのアンビバレントな思いが結実した作品だ。現実には一番息子の気持ちに寄り添っていた倭文重が、この作品を読めたのは、ここに込められた強い思慕の念を読み取ることが出来たからではないか。母の思いに答えようとして、母の求める「人生のルール」に応じようとして、苦闘したその人生の軌跡がここにはあり、母恋いの物語といえるからだ。

「空つばの椅子が照りつく日差のなかに置かれ、卓の上にこぼれてゐる何かの飲物が、ぎらぎらと凄まじく反射している終わりの場面からは、冒頭の産湯の場面と同じく、水（飲み物）と日の光（日差し）があつて、『仮面の告白』は「裏返し15の自殺」と述べているように、再生しようとする方向性を、「ぎらぎら」という表現からその強い意志を読み取ることができよう。それは母へ持ちつづけた思いを整理したことで、承認されたいことを受け止め再び自己の人生を歩もうとする、精神的な親離れの小説ともなっているのだ。

注(1) 前田貞昭氏はこの光景は『私』が実際に見たものではない。後年に形成されたものが、『私』の原風景の形で、作品冒頭に象徴的な意味を込めて配置されている。「胎内幻想の一種と見られる『産湯幻想』であった」と指摘されている。（『仮面の告白』論―『私の』存在基盤をめぐって―『国文学攷』第85号一九八〇年）また『誕生を記憶する子どもたち』（デーウィット・チェンバレン 片山陽子訳 春秋社 一九九一年）によると、生まれた後赤ちゃん是他の大人の気配に敏感であり、自分に何

をしてくれたかよく覚えているということである。主人公のように自分一人の光景を語る子供はいない。

- (2) 「女が美しく生きるには」(『美しき人生読本』一九五九年)
- (3) 『天一一代』(N T T出版 二〇一二年)
- (4) 「三島由紀夫没後三十年」(『新潮』一九四四年)
- (5) 「新潮」(一九七六年 十二月)
- (6) 山竹伸二『認められたい』の正体」(『講談社 二〇一一年』)
- (12) 例えば佐藤秀明氏は「聖セバスチャンの不在」『板面の告白論』」の中で主人公にとって聖セバスチャンはあるべき姿で「他者ではない」「私」自身に欲望が向かっていた」と指摘している。(『日本近代文学』一九八四年) また近江に対しても、近江にはなれないから愛を諦めようとすることからやはり近江を介しての自分への欲望であり、自己愛といえる。「ナルシズムとは自己と対立する自分のイメージへの惚れこみなのだ。ナルシストはほんとうの自己ではなく自分のイメージを愛する」という指摘は主人公を言い当てたものとなっている。(A・Dローウエン 森下伸也訳『ナルシズムという病』新曜社 一九九〇年)
- (14) 「母を語る」(『婦人生活』一九五八年)
- (15) 「『板面の告白』ノート」(河出書房 一九四九年)

※三島の引用は『決定版三島由紀夫全集』新潮社による

受贈雑誌(七)

日本近代文学館年報	日本近代文学館
日本研究	国際日本文化研究センター
日本言語文化研究	日本言語文化研究会
日本語学論集	東京大学大学院人文社会学系研究科国語研究室
日本語学論集	創価大学日本語日文学会
日本語学論集	武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日文学専攻
日本語学論集	科日本語日文学専攻
日本語学論集	日本大学大学院文学研究科国文学専攻
日本語学論集	官城学院女子大学日文学会
日本語学論集	盛岡大学日文学会
日本語学論集	盛岡大学日文学会
日本語学論集	大東文化大学日文学会
日本語学論集	大東文化大学日文学会
日本語学論集	法政大学国文学会
日本語学論集	法政大学国文学会
日本語学論集	東洋大学日文学文化学会
日本語学論集	東洋大学日文学文化学会
日本語学論集	國學院大學國文學會
日本語学論集	大東文化大学院日文学専攻院生会
日本語学論集	法政大学大学院日文学専攻院生会
日本語学論集	関西学院大学日文学会